

『リトル・ドリット』における『さすらい人』に対する引喩

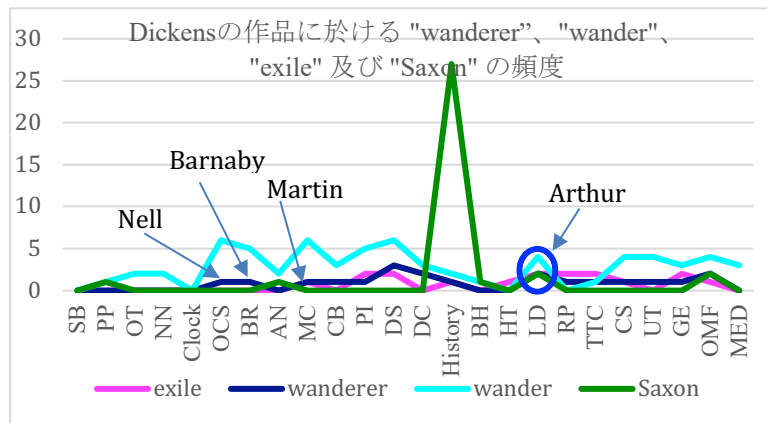
救助の働きをする引喩としての『さすらい人』

定行あし江

I. 序

『リトル・ドリット』はディケンズの後期の小説で、代表作の一つである。アルフレッド大王と時計の故事が登場し、ゴート族という言葉が古代を意識させる。OEを語源とする“afeared”(36)が使われ(Brook 241; Trench 217)、この語の語源を紹介した Trench の本は当時大変人気があったので(Thatcher 21)、早い段階で OE が意識されていると言えよう。アーサーは「(運命の) 波に押し流され漂うように生きてきた」。父亡き後、大海原を越えて故郷のロンドンへ辿り着いたので、wanderer であり exile の身の上である。これが『さすらい人』(*The Wanderer*)を思い出すきっかけとなった。ロンドンは創世記の大洪水の直後のように描かれ(Hornback 101)、街は “Water, water, every where” という『老水夫行』のリズムが響くが、この詩では船は氷の海に閉ざされるので、冬の海を連想させる。Wanderer, exile、冬の海、古英語の時代と繋がると、『さすらい人』を思い出す。

表 1



ディケンズの全作品について“wanderer”、“wander”、“exile”、“Saxon”という言葉の頻度を調べると、小さいながらも四つが重なり合うように山ができて前後の作品よりも僅かながら数値が高かったのが、LDであった(表1)。

『リトル・ドリット』のアーサーの物語には『さすらい人』に対する allusion (引喩) (Gager 163)が使われていると考えるのであるが、allusion は参照する原典に沿って、将来起きるできごとを予告することができる。従って、第1章で呈示

された黙示録に対する allusion の影響によって物語は終わりの時めざして進み、危機が迫る。しかしながら、破滅めざして進んでいたはずの物語は急旋回し、からくもアーサーは生き延びる。

何故助かるのか。そこでサクソンと関係があり冬が舞台の中心である『さすらい人』に対する allusion がアーサーを救う働きをしていると考え、救助も機能に加えて考察した。救助の機能を果たす allusion を、レスキュー allusion と呼ぶことにした。「引喩」という言葉は「隠喩」(metaphor)と紛らわしいので、本稿では allusion という言葉を用いることにする。

II. 古英語の哀歌『さすらい人』

『さすらい人』は Exeter Book に収められているが、後に Thorpe が翻訳した *Codex Exoniensis* では *The Wanderer* と題名を付けられた。*A Dictionary of Literary Symbols* (1999)に拠れば、古英語の詩は冬の描写に優れている。Anne L. Klinck が古英語の哀歌の特徴的な風景として Herbert Pilch からの引用 “The sea with cliffs, hail, snow, rain and storms” を挙げているが(Klinck 11)、『さすらい人』も冬景色が秀逸であり、荒涼とした廃墟を背景として wanderer の孤独と exile、悲しみ、人の世の儚さ、亡き寛大な主君(“goldwine” (*Wan* 22, 35, ‘gold lord’, ‘gold friend’))への追憶などが描かれている。

III. 『リトル・ドリット』と『さすらい人』の相似

この時を隔てた二つの作品は 1) “wanderer” という主人公の状態 2) 冬、海、廃墟という景色 3) 廃墟、崩壊、儚さ、生々流転という一連のできごと 4) 未曾有の逆境を経て生き残る知恵を得ること 5) 懐旧と “goldwine” 或いはそれに匹敵する者の存在という点で似ている。

第五の懐旧であるが、『リトル・ドリット』を読んで特に『さすらい人』を思い出させるのは、Thorpe の訳を引用すれば “Where is horse, where is man?” という文と “here is wealth transient, / here is a friend transient, / here is man transient”

という繰り返しの二箇所である。アーサーが帰還したロンドンでは馬の描写が少なく、馬が消えたかのようにである。消えたのは馬だけではない。ラドゲイトヒルの珈琲店の給仕の台詞は一瞬白牡鹿亭のサム(PP Ch. 10)を思い出させるが、サムもピクウィック氏もいない。この世では富も友も人も儂く消えると *Wanderer* 詩人は言うが、この小説第二部の内容と符合する。原文では“*laene*” (Wan 108-9)が4回繰り返され、*The Old English Elegies* のグロッサリーに拠ればこれは形容詞で“*loaned; temporary, fleeting*”を意味する(Klinck 425)。『リトル・ドリット』ではマーシャルシー債務者監獄が舞台なので、この世の物は全て借り物と考えれば、“*laene*” (“*loaned*”)という言葉が腑に落ちる。“*Goldwine*”に匹敵する人物がいることについて。『リトル・ドリット』は山上の垂訓で説かれる黄金律の世界であり(Larson 264-65)、太陽の光を浴びアーサーの獄舎を訪れたリトル・ドリットはキリストになぞらえられている。

IV. 『さすらい人』に対する allusion の機能

『さすらい人』はどのような機能を果たしているのだろうか。『リトル・ドリット』では第1章の黙示録の影響で、冒頭から終わりの時めざして進む(Larson 179-80)。舞台は南仏から始まり英国とフランス、イタリアを往来するが、マロリー卿の『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*)に対する allusion は無い。ギヨーム・ド・ロリスの『薔薇物語』(*Le Roman de la Rose*)の影響は『リトル・ドリット』にも及んでいるが、『アーサー王の死』の allusion が無いのは不思議である。その原因は、一つは早い段階で古英語の時代が優先的に思い出されることである。今一つは、『さすらい人』の最初と最後は後世付け加えられキリスト教的であるが、本文はアングロサクソンの考え方を反映している(Klinck Textual Notes 1-5, 106)。黙示録や中世の脚韻詩を用いて不吉な未来を予言しそれによって破滅への道を辿らせようと計画しても、古英語の時代に成立した『さすらい人』は生き残る道しか用意しない。前者の攻撃を後者(『さすらい人』)がカウンターアタックし、破滅への道をブロックしてしまう。こうしてアーサーを救うのが『さすらい人』に対する allusion の機能だと思う。レスキューallusion は『さすらい人』だけではない。ラヤモンの『ブルート』(*Lazamons Brut*)の Leir 王の話(Madden 123-160)、『ピクウィックペーパーズ』の Holyrood の話(PP Ch. 49)も協力している。

V. まとめ

『さすらい人』に対する allusion は、他の作品と協力してアーサー達を危機から救う。

参考文献

- 本稿は Dickens, Charles. *Little Dorrit*. The Oxford Illustrated Dickens. Oxford: Oxford UP, 1994 に拠る。
Bloom, Harold. *A Map of Misreading*. Oxford: Oxford UP, 2003.
—. *The Anxiety of Influence*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1997.
Brook, G. L. *The Language of Dickens*. London: Andre Deutsch, 1970.
Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. The Oxford Illustrated Dickens. Oxford: Oxford UP, 1979.
Gager, Valerie L. *Shakespeare & Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
Hollander, John. *The Figure of Echo*. Berkeley: U of California P, 1981.
Hornback, Bert G. *Noah's Arkitecture*. Athens: Ohio UP, 1972.
Klinck, Anne L. *The Old English Elegies: A Critical Edition and Genre Study*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's UP, 1992.
Krapp, George Philip, ed. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. Vol. 2. *The Vercelli Book*. New York: Columbia UP, 1932.
Krapp, G. P., and E. V. K. Dobbie, eds. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. Vol.3. *The Exeter Book*. New York: Columbia UP, 1936.
Larson, Janet L. *Dickens and The Broken Scripture*. Athens: U of Georgia P, 1985.
Madden, Frederic, ed. *Lazamons Brut: Or Chronicle of Britain*. vol. 1 London: the Society of Antiquaries of London, 1847.
Thatcher, Barry. “Dickens’ Bow to the Language Theory Debate.” *Dickens Studies Annual*. 23 (1994): 17-47.
The Cambridge History of The English Language. Vol. 1. Ed. Richard M. Hogg. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
Thorpe, Benjamin, ed. *Codex Exoniensis*. London: The Society of Antiquaries of London, Pickering, 1842.
Trench, Richard Chenevix. *English, Past and Present*. 7th ed. New York: Scribner's, 1871.
Wheeler, Michael. *The Art of Allusion in Victorian Fiction*. London: Macmillan, 1979.